



ここでとりあげた自意識は、あらわれとしては、はにかみ、無口、非協力(すねる、あまのじゃく)、非活動などの内向的傾向と、はしゃぐ、誇示・誇大な活動をするなどの外向的傾向とがあり、これらの傾向がかなり目立つものであって、しかもそれが、子ども自身の自己に対する注意や認識、評価に由来するものと理解される場合、そのようなあらわれをもつ子どもを自意識の強い子どもとしてみとめる、というほどの意味である。

問題になると考えられたことは、自意識に関連して、見せかけの能力と、真の能力との間に差異があり、たとえばかなり高いIQをもっているにもかかわらず、両親からも教師からも、能力が低いものであるかのように見られる子どもがあること、そういう子どもも見せかけの能力を低下させているものが、多分に自意識からくる不適応状態にあると見られること、しかもまた、自意識と知能はある程度正比例する……知能が高ければ自意識もまた強い、という相互関係がある程度成立すると、などについてである。

西南児童教育科付属舞鶴幼稚園の最近数年間の事例研究の控えにあらわれた自意識の強い子どもについていえば、IQの最低が一三二、最高が一四八、最も頻度が多くみられるのは一三〇前後である。また逆に知能一二〇以上のものについてみると、自意識がよいとみとめられるのが過半を占め、やや強い傾向がみとめられるものまで含めれば、殆ど全部そうだといつてよいようである。

自意識の尺度について、決定的なものをもたぬまま、結論を求めるのは尚早であるが、しかし、幼児期にあつては自意識もまた心理発達上の重要なファクターであり、心身の発達が良好であり機能が活発であるという事実と、自意識が強いこと、知能がすぐれていることとは、それぞれ別個に切り離せない相互関係があるものと

いう見方は成り立つといつてよいであらう。

このような事情の一事例として、Fという子どもをとりあげてみると、Fは日頃非常に情緒不安定な態度で落着きがなく、注意散漫であり、製作活動などは殆ど完成することがなかった。愛きょうはあつて、明るく人づきあひもよい方ではあるが、時たまかんしゃくを起して激しく泣いたり暴れたりするので、園の教師たちは多少問題視していたし、決して優れたことでも見えていなかった。両親の他に祖父母とも健全で同居しており、祖父母と母とが可愛がる一方叱言や干渉の多い育て方をし、ことに他家の子と比べて優秀をいうことが多く、子ども自身も始終自分のことも他の子のことも、よいとか、だめだとか、上手とか、下手とかの評価をことごとくに口にするという風であつた。劣等感もかなりはつきりともっていると思われるが、IQを出すと一三六を示し、この数字には両親教師ともやや意外の感を抱いたのである。

また、Nという子どもは、いわゆる「ものをいわぬ何もしない子」であつたが、IQは一四八もあり、ことに語彙の習得で優れていることがテストの結果明らかになつた例である。

事例をあげていくとなお多くのものがあるが、とくに見せかけの能力が低く、真の能力、少くともその一面を示すIQが高い例として、FとNとはかなりはつきりした形を示すものと思われた。

Nはいうまでもなく内向的なタイプであつて、こういう例はむしろ通常かなり多く発見されるころであると思われる。よく親たちは能力が劣っているように思つて案じるが、発表することに自信がつけられさえすれば割合に早く円滑に自分を調整できるようになるものであるし、内心ではすでにかなりたしかな固い自尊心や自信を抱いているものであるから、まだしも取扱ひ上の困難が少いとも

いえるかと思う。これに対してFは、完全に外向的であるとはえないかもしれないが、一応明るくおしゃべりで人づきあいがよい点、まず外向的な傾向に属していると見られるであろう。そして、Fの方は子ども自身が、自尊心よりも劣等感の方をはっきり意識している。かえって自分の劣っていることを口に出してそれで人を笑わせ、自分を慰めているような「道化もの」の傾向を幼いながらに見せているのである。このFのような子に自信をもたせ落着かせることはNの場合よりは困難であると考えられる。そして、知能は決して劣るものではないにしても、実際に生活者としての能力は劣るといわなければならないこともみとめなければならない事実である。

幼児の中には、非常に高い知能をもち、しかも素直で活発でわきまがあらながら少しも余計な意識や評価にわずらわされない、本当に好ましい Personality の者も、少数ではあるが存在する。してみれば、環境の条件をよく整えれば最も好ましい成長が可能なのであり、知能のすぐれた子を自意識の犠牲にすることもさけられるといえる。知能と自意識との相互に関連深い発達は、さきへのべたように発達それ自体の当然のなりゆきとしてもみられると同時に、その子をめぐるおとなたちの自意識の押しつけや誘発も相当な因子として考えられる。子どもの教育に当って（自意識に関連して）見せかけの能力については常に再考の必要があり、また真の能力の正当な成長を阻害しないための心づかいが重要なことなどについて、注意すべき点をいくらかでも明らかにしたいとつとめた。

なお幼児期においては、知能と自意識とは、ほぼ正比例するが、児童期の終りから思春期にかけてはしばしば、反比例する例もあると思われ、その間の事情に対しても調査検討をつづげたい。

## 幼児指導のための

### パーソナリティの一調査

北海道教育研究所員 小林 幹夫

#### 一、研究のねらい

幼児指導にあたって、幼児をどうみることがいかに重要であるかをここ数年來研究をつづけた。前回にひきつづいてパーソナリティの面から幼児の実態をとらえること、とくに今回教師側の幼児の性格、行動の観察を取上げ、望ましい指導に役立てるために、種々の問題を考察した。

#### 二、調査の対象と実施経過

北海道の三つの地区から、それぞれ施設を選んで大略次のように調査をすすめた。

#### 第2次 調査報告分

(略称)	施設	(対象人員)	(先生)	(調査期間)	(調査種目)
(I)	小学一年美唄市々立美唄小学校	一年生七名	八	三年四月、六月	家庭・一式・二式
(II)	A 施設 函館市々立函館幼稚園	全園児七名	七	三年四月、五月	家庭・一式・知能
	B 施設 札幌市私立発寒幼稚園	全園児五名	四	三年三月、五月	家庭・一式・二式

本報告においては、それぞれの施設名と略称をもって示してある。

#### 三、調査方法